

『經典』に学ぶ

妙法蓮華經如来寿量品第十六

經文

われほとけ え このかた へ ところ もるもろ こっしゅ むりょうひやくせんまん
我 仏を得てより 来。經たる所の 諸の劫数。無量百千万。億載阿僧祇(おくさ
いあそうぎ)なり。常に法を説いて。無量億の衆生を教化して。仏道に入らしむ。
しか このかた むりょうこう しゅじょう ど ため ゆえ ねはん げん しか じつ
爾しより 来 無量劫なり。衆生を度せんが為の故に。方便して涅槃を現す。而も実
には滅度せず。常に此に住して法を説く。我常に此に住すれども。諸の神通力を
めつど つね ここ じゅう ほう と われつね ここ じゅう もるもろ じんづりき
以て。顛倒(てんどう)の衆生をして。近しと雖も而も見ざらしむ。衆我が滅度を
もつ みて ひろく しゃりを ぐやう ことごと みなれん ぼ いた ころろ しょう
見て。広く舍利を供養し。咸く皆恋慕を懷いて。渴仰(かつごう)の心を生ず。
しゅじょうすで しんぶく しちじき いっしん ほとけ み
衆生既に信伏し。質直にして意柔輒(こころにゆうなん)に。一心に 仏を見たて
まつらんと欲して。自ら身命を惜まず。時に我及び衆僧。俱に靈鷲山に出ず。我
ほつ みずか しんみょう おし と き われおよ しゅそう とも りょうじゅせん い われ
時に衆生に語る。常に此にあって滅せず。方便力を以ての故に。滅不滅ありと現す。
とき しゅじょう かた つね ここ めつ ほうべんりき もつ ゆえ めつ ふつ げん
余國に衆生の。恭敬し信樂する者あれば。我復彼の中に於て。為に無上の法を説
よこくに しゅじょうの ぐきやう しんぎやう もの われまたか なか おい ため むじょう ほうと
く。汝等此れを聞かずして。但我滅度すと謂えり。我諸の衆生を見れば。苦海に
なんだち こ き ただわれめつど おも われもるもろ しゅじょう み ぐかい
没在せり。故に為に身を現ぜずして。其れをして渴仰(かつごう)を生ぜしむ。
もつざい かるがゆえ ため み げん そ
其の心恋慕するに因って。乃ち出でて為に法を説く。神通力は是の如し。阿僧祇劫
そ こころれん ぼ よ すなわ い ため ほう と じんづりきかく ごと
(あそうぎこう)に於て。常に靈鷲山。及び余の諸の住処にあり。衆生劫尽き
おい つね りょうじゅせん およ よ もるもろ じゅうしょ しゅじょうこうつ
て。大火に焼かると見る時も。我が此の土は安穩にして。天人常に充滿せり。園
だい か や み と き わ こ ど あんのん てんにんつね じゅうまん おん
林 諸の堂閣。種種の宝をもって莊嚴し。宝樹花果多くして。衆生の遊樂する所
りんもるもろ どうかく しゅじゅ たから しょうごん ほうじゅけ か おお しゅじょう ゆらく ところ
なり。諸天天鼓を撃つて。常に諸の伎樂を作し。曼陀羅華を雨らして。仏及び大
しよてんてんく う つね もるもろ ぎがく な まんだらけ ふ ほとけおよ だい
衆に散ず。我が浄土は毀れざるに。而も衆は焼け尽きて。憂怖諸の苦惱。是の如
しゅ さん わ じょうど やぶ しか しゅ や つ きて うぶもるもろ くのう かく ごと
き悉く充滿せりと見る。是の諸の罪の衆生は。惡業の因縁を以て。阿僧祇劫
ことごと じゅうまん み こ もるもろ つみ しゅじょう あくごう いんねん もつ
(あそうぎこう)を過ぐれども。三宝の名を聞かず。諸の有ゆる功德を修し。柔和
す さんぼう みな き もるもろ あら くどく しゅ にゅうわ
質直なる者は。則ち皆我が身。此に於て法を説くと見る。或時は此の衆の為に。
しちじき もの すなわ みな わ み ここ ほう と み あるとき こ しゅ ため
仏寿無量なりと説く。久しくあって乃し仏を見たてまつる者には。為に仏には値
ぶつじゅ むりょう と といひ しま ほとけ み もの ため ほとけ あ
い難しと説く。我が智力是の如し。慧光照すこと無量に。寿命無量劫。久しく業を
がた と わ ちりきかく ごと えこうら むりょう じゅみょうむしゅこう ひさ ごう
修して得る所なり。汝等智あらん者。此に於て疑を生ずることなかれ。当に断じ
しゅ とう ところ なんだち ち もの ここ おい うたがい しょう まさ だん
て永く尽きしむべし。仏語は實にして虚しからず。医の善き方便をもって。狂子を
なが つ きしむべし ぶつご じつ むな い よ ほうべん おうじ
治せんが為の故に。實には在れども而も死すというに。能く虚妄を説くものなきが
じせんがため ゆえ じつ あ しか し よく こもつ と

ごとく。われもまたこれよ世のちちもろもろくげんすくものぼんぶ
如く。我も亦為れ世の父。諸の苦患を救う者なり。凡夫の顛倒(てんどう)せる
を為て。実には在れども而も滅すと言う。常に我を見るを以ての故に。而も憍恣(き
ょうし)の心を生じ。放逸にして五欲に著し。悪道の中に墮ちなん。我常に衆生
の。道を行じ道を行ぜざるを知って。度すべき所に随って。為に種種の法を説く。
毎に自ら是の念を作す。何を以てか衆生をして。無上道に入り。速かに仏身を成
就することを得せしめんと。

現代語訳

「私が仏となってから、これまでに経った時間は無量・無限です。そのあいだ私は、
常に真実の教えを説き、無数の衆生を教化して仏道に導きました。そのときからも
また、無量の月日が経っているのです。

私は衆生を救う手段の一つとして、この世から姿を消したこともありますが、
実際は滅度(入滅)したのではなく、常にこの娑婆世界にいて法を説いているのです。

私は常にこの世界にいますが、自由自在な神通力によって、顛倒(てんどう)し
ている(何ごとも自分中心に考え、ものごとの真実を見ようとしない)衆生には姿
が見えないようにするのです。

衆生は、私が入滅したのを見て、舍利をまつて供養をし、そこではじめて真剣
に仏の教えを求めようという心を起こします。求道の心を起こした衆生は、教え
を心から信じ、柔らかく素直な心で、仏とともにいるという自覚を得ようと、命を
も惜しまないほどの真剣さで努力します。

このような人びとが多くなれば、私は弟子たちとこの世に出てきて、『私は常にこ
こにいますが、教化の手段として必要だと思われるときに入滅を見せるのです。また、
この世界以外の場所でも、正しい教えを敬い、信じ、聞きたいと願う人たちがいれば、
私はその人たちの前にも現われて無上の法を説きます』と衆生に語ります。多くの人
は、このことを知らないために、私が滅度するのだと思い込んでいるのです。

仏の眼で衆生を見ると、多くの人苦の海に沈んで、苦しみもがいています。さ
ればこそ、私はわざと身を現わさないで、衆生に自ら仏を求める気持ちを起こさ
せるのです。

仏を恋慕する心の人びとに起これば、すぐに身を現わして、その人たちのために法
を説きます。仏の神通力とはこのようなものであって、無限の過去から無限の未来ま
で、娑婆世界およびその他の世界に仏は存在しているのです。

衆生の目で見ると、世界全体が大火に焼かれてしまうような時代になっても、仏の

くに 安穩であって、天上界の者や人間界の者がたくさん集まり、楽しい生活を送っています。美しい花園や静かな林、光輝く宝玉によって飾られた立派な建物がたくさんあります。木々には美しい花が咲き、豊かな実がなっていて、その下で人びとは何の憂いもなく遊んでいます。天人は妙なる音楽を奏で、曼陀羅華の花びらを雨のように、仏や人びとの上に散じています。

仏の眼から見た世界は、このように平和で美しいのですが、衆生の目から見ると、あたかも大火に焼かれるがごとく、不安や恐怖に満ちているように見えるのです。このような衆生は、よくない行ないを積み重ねるために、長い年月が経っても三宝(仏・法・僧)の名を聞くことができません。

反対に、世のため人のためにさまざまな善行をなし、心が柔和で素直な者は、私がいづもそばにいて常に法を説いている姿を見る(自覚する)ことができるのです。そのような人びとに対して、あるときは『仏の寿命は限りないものであって、無始無終である』と説きます。長いあいだかかって、ようやく仏の存在を知った人には、『仏に出会うことは難しいのだから、いま出会えた喜びを胸に刻んで、怠らず励むのですよ』と説くこともあるのです。

仏の智慧の力はこのように大きいものであり、その智慧の光が照らした世界は無量です。また、仏の寿命も無量であって、それは長いあいだ善業を積んで得た寿命なのです。

ほんとうの智慧を求めようとしているみなさんは、仏の寿命が永遠であり、智慧の力が無限であることを疑ってはなりません。もし、疑いを起こすような迷いの心があれば、永久に断ち切ってしまうなければなりません。仏の言葉は、すべて真実なのです。

先に述べた譬え話において、毒を飲んで本心を失ってしまった子どもたちを治すために、医師が善い方便をもって、実際は死んでいないのに『死んだ』と告げさせたことを、だれもとがめたりしないのと同じように、仏が姿を見えなくするのも決してうそ、偽りではありません。

私は父です。世の父です。さまざまな苦悩を抱える衆生を救う者です。いつも衆生のそばにいて、その苦しみを除こうとしているのですが、凡夫の心が顛倒(てんどう)しているので、その真実を見ることができません。そこで、その目を覚まさせるために、実際はそばにいても『時期がくれば姿を消すのだ』と告げるのです。

もし、いつでも仏に会えるのだということになれば、衆生にわがままな心が生じて五欲に執着する(己の欲望にとらわれる)ため、修羅(争いの世界)や地獄(怒りの世界)などもろもろの悪道の苦しみが人生に現われてくるのです。

わたし しゅじょう つね み ものはよく ほとけ みち ぎょう もの
私は衆生のすべてを常に見とおして、ある者はよく 仏の道を行じており、ある者
は行じていないということを知り尽くしていますから、衆生の心がけや教えを理解
する力に於いて、適切な方法を選び、さまざまに法を説いてあげるのです。とはいえ、
どんな衆生に対しても、私の本心は少しも変わりません。どうしたら衆生を仏の道
に導き入れることができるだろうか、どうしたら速やかに 仏の境地に達せしめるこ
とができるだろうか、常にそれのみを念じているのです」

じんづうりき い じんづうりき しゅぎょう え ふ し ぎ ちから
神通力 ここで言う神通力とは、修行などによって得られる不思議な力という
ことではありません。久遠実成の本仏は、宇宙の一切のものを生かしている根源の
だいせいめい じゅうじざい ちから も ちから ひょうげん
大生命ですから、自由自在の力を持っておられます。その力を表現しているのです。
りょうじゅせん しゃくそん ほけきょう と ばしよ りょうじゅせん
靈鷲山 釈尊が法華經を説かれた場所が靈鷲山であったために、こうおっし
やられたのであって、真の意味は「この世」ということです。私たちが 仏の教えを
聞くところは、どんな場所であっても、そこが 靈鷲山なのです。

よこく しゃば せかいがい こくど うちゅう ばしよ
余国 娑婆世界以外の国土ということですが、宇宙のありとあらゆる場所とい
う意味にとらえるといいでしょう。

まんだらけ てんじょうかい き はな み ひと ころ よろこ うつく
曼陀羅華 天上界に咲く花で、見る人の心を喜ばせずにはおかない、美しい
花のことです。

つみ しゅじょう ぶつきょう つみ かなら わる い み
罪の衆生 仏教でいう罪とは、必ずしも悪いことをしたという意味だけでは
なく、煩惱に振り回されて、自らの仏性をくらましてしまっていることもいいます。

さんぼう みな き ほとけ あ ほとけ おし
三宝の名を聞かず 仏さまに会うことも、仏さまの教えにふれることも、教え
を求め仲間に入れてもらう機会にも恵まれないということですが。

えこうむりょう ほとけ ちえ ひかり て せかい むりょう
慧光無量 仏の智慧の光が照らした世界は無量であるということは、いつ、
いかなる場所でも、迷いの闇にいる衆生に救いの力を与え、仏性を輝かせる働き
をするということですが。したがって、すべての人が必ず真理に目覚めることができる
という意味です。

意味と受け止め方

永遠のいのちに生きる

これまで釈尊は、譬え話や過去世の物語などを用いながら、「人間の本质は仏
性である」ということを、くり返しお説きになられました。説法を聞いていた人びと
も順々に、自らが本仏のいのちの顯われであることに目覚め、自分が 仏の子であ

るといふ^{じかく}自覚^たに立つことができるようになってきました。

人^{ひと}びとの心^{しんきょう}境^{たか}が高まったことを見^みきわめられた釈尊^{しやくそん}は、いよいよ最高^{さいこう}の真実^{しんじつ}を打ち明^あけるときの訪^{おとず}れたと判断^{はんだん}されます。そして、仏^{ほとけ}の本体^{ほんたい}と仏^{ほとけ}の力^{ちから}（働^{はたら}き）について明^{あき}らかにされるのです。

つまり、仏^{ほとけ}の本体^{ほんたい}は無^{むげん}限^かの過^こ去^{むげん}から無^{むげん}限^{みらい}の未^く来^{おんじつじょう}まで（久遠実成^{くおんじつじょう}）あまねく宇宙^{うちゅう}に遍満^{へんまん}している大^おいなる永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのち（本^{ほん}仏^{ぶつ}）であり、本^{ほん}仏^{ぶつ}が万^{ばん}物^{ぶつ}を生^いかす力^{ちから}は、いつでもどこでも変^かわるこ^{えいえん}となく永^{えいえん}遠^{えいえん}に存在^{そんざい}することを教^{おし}えられるのです。

これは「仏^{ほとけ}」についてだけ教^{おし}えられたものではありません。私^{わたし}たちのいのちもまた永^{えいえん}遠^{えいえん}であることを示^{しめ}してくださっているのです。なぜならば、私^{わたし}たちはみな本^{ほん}仏^{ぶつ}のいのちの頭^あわれであり、本^{ほん}仏^{ぶつ}と一^{ひと}つのいのちにつながっているからです。

人間^{にんげん}としての肉^{にく}体^{たい}は、やがて必^{かなら}ず死^しを迎^{むか}えます。それはち^{むか}ょうど、どん^{むか}なに大^{たい}切^{せつ}にしている服^{ふく}でも、いつか^{ふる}は古^{やぶ}び、破^すれて、捨^すてるときがくるのと同じです。しかし、私^{わたし}たちのいのちの本^{ほん}質^{しつ}は肉^{にく}体^{たい}ではありません。仏^{ぶつ}性^{じょう}、すなわち本^{ほん}仏^{ぶつ}と一^{いつ}体の永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのちです。

会^{かい}長^{ちやうせんせい}先生^{せんせい}は、ご著^{ちよしよ}書^{しんてん}『心^{たが}田^やを耕^かす』のなかで、このように述べられています。

「人間^{にんげん}のいのちは無^む限^{げん}ですが、私^{わたし}たちは無^む常^{じょう}の法^{ほう}、永^{えいえん}遠^{えいえん}なる真^{しん}理^り・法^{ほう}を認^{にん}識^{しき}できる能力^{のうりよく}を具^{そな}えています。それは、私^{わたし}たちが有^{ゆう}限^{げん}な存在^{そんざい}でありながら無^む限^{げん}にふれることができ、つまり永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのちにジ^{れん}ョ^んイ^んト（連^{れん}結^{けつ}）できるとい^むうこと^{じょう}です。無^む常^{じょう}の法^{ほう}を認^{にん}識^{しき}することは、永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのちを知^しることに通^{つう}じます。有^{ゆう}限^{げん}なる人間^{にんげん}が無^む限^{げん}なる法^{ほう}にふれ、結^{けち}縁^{えん}することによって、永^{えいえん}遠^{えいえん}に生^いきつづけているのです」

万^{ばん}物^{ぶつ}を生^いかす本^{ほん}仏^{ぶつ}の働^{はたら}きとは、真^{しん}理^り・法^{ほう}の働^{はたら}きそのものです。その働^{はたら}きは、私^{わたし}たちの身^みの外^{そと}側^{がわ}にも内^{うち}側^{がわ}にも頭^あわられています。ですから、永^{えいえん}遠^{えいえん}なる真^{しん}理^り・法^{ほう}は、私^{わたし}たちのいのちそのものなのです。

この真^{しん}実^{じつ}を心^{こころ}の底^{そこ}から確^{かく}信^{しん}できたとき、私^{わたし}たちは「肉^{にく}体^{たい}の死^し」という、人間^{にんげん}としての根^{こん}本^{ぼん}的^{てき}な恐^{きょう}怖^ふ・苦^く悩^{のう}から解^とき放^{はな}たれます。そして、大^{おお}いなる永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのちに生^いかされて生^いきる喜^{よろこ}びを味^{あじ}わいながら、人間^{にんげん}として生^うまれた真^{しん}の目^{もく}的^{てき}である、「自^みらの成^{せい}長^{ちやう}・向^{こう}上^{じやう}」と「世^よの人^{ひと}びとへの貢^{こう}献^{けん}」に向^むかって、い^{あゆ}きい^だと歩^{あゆ}み出^だすことができるのです。

如^{にょ}来^{らい}寿^{じゆ}量^{りやう}品^{ほん}が法^{ほけき}華^{きやう}經^{ぜんたい}全^{がん}体^{もく}の眼^り目^{ゆう}とされる理^り由^{ゆう}は、こ^ここにありま^す。

ひと
一つになる

大^{おお}いなる永^{えいえん}遠^{えいえん}のいのち・本^{ほん}仏^{ぶつ}と同^{おな}じ一^{ひと}つのいのちにつながっているのは、何^{なに}も人間^{にんげん}

だけではありません。花も鳥も、ありとあらゆるすべての存在が、本仏のいのちの顯われです。お互いに、さまざまに関連し合っ^て生かされて生きているのです。

このことを深く見^つめてみると、私たちは生きとし生けるものと一つのいのちを生きているということがわかります。ですから、永遠の大いなる一つのいのちを生きているということは、すべての存在と一つにつながっていく(大調和)ということなのです。

では、大いなる一つのいのちを生きている私たちは、なぜ人間に生まれてきたのでしょうか。それは法師品でも学ばせていただいたように、心の成長・向上をめざし(自利)、仏と同じ境地に至るためです。

仏と同じ境地ということですから、見方を変えると、苦しみ悩む人びとを救うため(利他)に生まれてきたともいえるでしょう。世のため人のためにつくせる人間となるために自分を成長させるのであり、自分の成長・向上を図るために利他行に励むつまり自利と利他は表裏一体の行なのです。

親と子の関係

私たちが自利・利他に励む姿を、仏さまは、わが子の成長を楽しみにしている親と同じ心で、目を細めて見守ってくださっています。そのお姿を、釈尊は「良医の譬え」によって、わかりやすくお説きくださいます。

あるところに一人の名医がいました。医師にはたくさんの子どもがおり、父が所用で他国へ出かけているあいだに、誤って毒薬を飲んでしまいました。いつもは決してそんなことはしない子どもたちですが、父が留守のあいだに、やりたいほうだいの生活をしていたので、このような事態になってしまったのです。

子どもたちが地べたをはって苦しんでいるところへ、父が帰ってきました。子どもたちは、父の姿を見て喜び、「お父さん、私たちは愚かにも毒薬を飲んでしまいました。どうか助けてください」と訴えました。

父は、よく効く種々の薬草から、色も香りもよいものを選んで調合し、子どもたちに与えました。薬を飲んだ子どもはすぐに治りましたが、毒の回りが早く、苦しみの激しさに本心を失っている子どもは飲もうとしません。

そこで父は一計を案じ、「みんな、よく聞きなさい。私はもう年をとって体が弱っている^{ので}、いまのうちに^い行かねばならない^{ところ}がある。これからまた出かけるが、薬をここに置いておくから自分で飲むのだよ」と言って、家を後にしました。そして、旅先から使いを出し、「父上は亡くなられました」と^つげさせたのです。

子どもたちはたいへん嘆き、悲しみました。本心を失っている子どもも、そのショックではっとわれに返り、父が残してくれた薬を飲んで、毒を消すことができました。子どもたち全員が治ったことを見届けた父は、再び姿を現わして子どもたちを喜ばせました。

この譬えにある父の医師とは仏さまのことであり、子どもたちは私たち衆生をさします。毒は五欲に執着する煩惱のことであり、薬は仏さまの教えです。仏さまのみ教えを素直な心で受持し、身に行なえば、だれでも必ず救われることが示されています。

仏さまのような大導師がいつも身近にいて私たちを導いてくださっているときは、教えの尊さがわかり、教えにそった生活を送ることができます。しかし、指導者がいなくなってしまうと、教えはちゃんとそこにあるのに、ついわがままな心がわき起こり、自己中心のものの見方、考え方による執着心（貪欲）によって自ら苦悩を生じさせてしまうのです。譬えのなかで、子どもたちが毒を飲んで苦しんでいる姿は、このことを表わしています。

父が、さまざまな薬草を調合して飲みやすい薬をつくってくれたというのは、私たち衆生が理解できるようにと、仏さまがさまざまに法を説き分けてくださったということです。しかし、五官の楽しみに溺れ、煩惱に振り回されていのちの本質をくらましている人間は、教えを受持し、実践しようという気持ちになりません。それが本心を失っている子どもたちの姿です。

ところが、父は子どもたちの口を無理に開けて薬を飲ませることはせず、自らの意思で飲むまで待ちます。それは、信仰には「自ら」ということが何よりも大事だからです。

たとえば、勉強をする気のない子どもに、いくら親が「勉強しなさい」とくり返し言っても、塾に通わせても、本人にやる気がなければ何も身につけません。自分で求め、自分でつかんでこそ身になるのです。

仏さまは、教えを求める気持ちのない人びとをも決して見放したりせず、あらゆる手段を用いて救ってあげようとされます。そこで仏さまは、人びとの目を覚まさせるために、一時身を隠されるのです。すると、いままで無意識のうちに仏さまの慈悲に甘えっぱなしでいた人たちにも、自らの問題は自分たちで解決しなければならないという気持ちがふつつつと起こってきます。どんな人でも、いのちの本質は仏性なので、やがて真剣に教えを求めていこうという気持ちになっていくのです。

こうして子どもたちがすっかり治ったあとで、父が再び姿を現わしたということ

に、また大きな意味があります。これは、私たちが仏の教えを心から受持し、教えにそった生き方をすれば、仏さまの姿が見えてくるということです。もちろん、実際に肉眼で仏さまの姿が見えるということではありません。自分にふれるさまざまな縁のなかに、仏さまの大きな慈悲が確かに見えてくるのです。その結果、「常に仏さまといっしょにいるんだ。仏さまに見守られているんだ」ということが自覚できるわけです。

仏さまと人間の関係は、支配者と支配される者というものではありません。釈尊は、この譬えによって、本仏と私たちが親子であること、私たちが本仏の深い慈悲に抱かれて、生かされて生きていることを明らかにされたのです。

仏さまは深い慈悲の心で私たち一人ひとりを案じ、どうしたらよりよく成長・向上できるかを念じてくださっています。そして、私たちの成長の度合いに応じて、最も適切な「学びの機縁」を与えてくださるのです。

すべてが成長の種

ここで私たちは、仏さまがくださる「本質的な救い」の真の意味をはっきりと心に刻まなければなりません。仏さまの本質的な救いとは、「私たちの肉体生命は有限であっても、宇宙の永遠のいのちを認識することによって、私たち一人ひとりのいのちが、かけがえのないいのちであることに気づくこと。そして、真理・法にそいながら、自らの成長と他者への貢献の喜びを満喫できるような境涯になること」です。では、そうした目的に向けて、仏さまはどのように導いてくださるのでしょうか

地球には、六十億の人間が生活していますが、仏さまはその一人ひとりをわが子として見守り、いのちの大本の親として、絶対の慈悲を注いでくださっています。仏さまの慈悲のみ心は、ちょうど次のような言葉に表わせるでしょう。

「わが子よ、いつも心安らかであれ。そして、大いなる希望を持って成長の階段を一步一步踏みしめよ。仏はそのために必要な、あらゆる縁を与えるであろう」

こうして私たちに与えられる縁は、うれしいことや楽しいこと(順化=己事)も、悲しいことや辛いこと(逆化=他事)も、すべてが私たちを成長・向上させるための仏さまのお導きであり、私たちにとって貴重な学びの機縁なのです。

しかも、この学びの機縁は、私たち一人ひとりの成長の度合いに応じて、いまの自分が一歩向上するために最も効果的なかたちで、また絶妙のタイミングで与えられるのです。これを仏さまの偉大な方便(正しい教化の手段)といいます。人のや

さしさや美しい音楽、創意工夫ができる仕事などのうれしい縁は、私たちの心を豊かにし、躍動させながら成長の機縁となってくれます。同時に、病気や経済的な苦、人間関係の悩みなどといった辛い縁も、いままでの自分をひとまわりも、ふたまわりも大きく成長させてくれるのです。

悩みのなかで、私たちは他人の心の痛みを理解できるようになり、多くの人に支えられていることに気づき、人を信じること、許すことの尊さを知っていきます。目の前に現われるすべての縁には意味があります。その意味に私たちが気づき、大きな学びを得ることを、仏さまはじっと念じてくださっているのです。

アンテナを磨く

いま、私たちは仏さまと自分の関係、そして、仏さまの大なる慈悲の中身を知ることができました。ところが、実際に苦に直面すると「これも仏さまの慈悲」とは、なかなか受けとめられないものです。どんな出来事も素直に仏さまの慈悲として受けとめられるようになるには、ただ一つ、慈悲を感じとる心のアンテナを磨いていくほかにありません。

具体的に言うと、日々の生活のなかで《ありがたい》と思える出来事(己事)を見逃さないで、しっかりと味わっていくことです。

すばらしい書物に出会えた、おいしい食事をいただけた、席を譲って気持ちよかった……。こうした出来事があるたびに、「うれしいなあ。仏さまは私をほんとうにかわいがってくださっているんだ」と味わっていきます。

すると、徐々に「仏さまはいつ、いかなるときも、私に親としての絶対のお慈悲を注いでくださっている」という真実が、知識ではなく実感として納得できるようになるのです。

しかし、無理は禁物です。たとえば、道で転んだとき、《ついていないな、ひどい目にあった》と思ったとしたら、それはそれでいいのです。ただし、そのあとにうれしい出来事があったら、そこは見逃さないで、《また仏さまにかわいがられた》と味わっていきます。前に起こった出来事と、そこから生まれた感情をいつまでも引きずってはいけません。それは“とらわれ”であり、アンテナの感度を鈍くするもとです。気持ちをすっきりと切り換えましょう。

こうして無理なく、しかも注意深く仏さまの慈悲を味わっていくうちに、アンテナはしだいに感度を増していきます。すると、それに伴って「きのうまではありがたくなかったことが、きょうはありがたく感じる」という現象が次々に起きてくるのです。

そして、たとえと同じように道で転んでも、《ひざを擦りむいたけど、この程度ですんでよかった。ありがたい》と自然に思えるようになっていきます。

子どもが親の愛を日ごろから目に見えるかたちで味わっていれば、ときに厳しく叱られても、そこに込められた親のほんとうの気持ちを理解して、自らの成長の糧とすることができます。しかし、親の愛をふだん感じていない子どもは、叱られると落胆し、反発心すら抱くことがあります。

私たちも、親である仏さまの存在とその絶対の愛(慈悲)を、日ごろから身近に味わっていくことが大切です。そうすれば、心のアンテナは感度を増し続け、慈悲と思える現象の範囲はどんどん広がり、ついには目の前に現われるすべての縁に対して「これも親である仏さまがくださった絶対のお慈悲なんだ。よし、また一歩成長するぞ」と、元気にチャレンジできるようになるのです。

事例から学ぶ 1

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん(75) ... 佼成会の青年部活動も経験している 信仰二代目会員

アキオさん(45) ... 一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん(38) ... 婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん(16) ... やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん(9) ... 元気いっぱい的小学三年生

タロウくんが結婚

日曜日に、アキオさんの兄・ノブオさんが訪ねてきました。しばらく兄弟で話をしたあと、母親の部屋がある二階にあがって行きました。

「母さん、正月以来、顔を見せなくてすみませんでした。元気そうですね」

「あら、その口のひげ……。ますます父さんに似てきたわねえ。それはそ

うと、きょうは一人^{ひとり}で来たの」

「ええ、ちょっと話^{はなし}がありました」

「どうしたのよ、あらたまって。あなたらしくないじゃない」

「じつは、きょうは母^{かあ}さんにお詫^わびをしようと 」

「ノブオさんは、二男^{じなん}のタロウくんのことから話^{はな}し始めました。タロウくんは大学院^{だいがくいん}で海洋学^{かいようがく}を勉強^{べんきょう}していますが、先月^{せんげつ}になって突然^{とつぜん}、大学院^{だいがくいん}をやめると言^いいだしたのです。外資系^{がいしけい}の商社^{しょうしゃ}に勤^{つと}める、五つ年上^{いつとしうえ}の女性^{じょせい}と結婚^{けっこん}するために、どこかに就^{しゅう}職^{しよく}したいというのが理由^{りゆう}です。

ノブオさんと妻^{つま}のユミコさんは、息子^{むすこ}が女性^{じょせい}と交際^{こうさい}していることさえ知らなかっただけに、言葉^{ことば}が出^でないほど驚^{おどろ}きました。ノブオさんが心^{こころ}を落^おちつけて話^{はなし}を聞^きくと、タロウくんは「学生^{がくせい}のままに結婚^{けっこん}したら、彼女^{かのじょ}に経済^{けいざい}的な負担^{ふたん}をかけてしまう」と言^いいます。しかも「卒業^{そつぎょう}まで待^まてない。どうしても年内^{ねんない}に結婚^{けっこん}したい」の一点張^{いってんぱ}りです。後日^{ごじつ}、ノブオさんはタロウくんとその女性^{じょせい}に会^あいました。彼女^{かのじょ}の話^{はなし}では、二人^{ふたり}のあいだで確^{たし}かに結婚^{けっこん}の話^{はなし}をした。彼の気持^{かれき}ちはとてもうれしい。しかし、早急^{さっきゅう}に結婚^{けっこん}しようとは考^{かんが}えていない。彼^{かれ}に大学院^{だいがくいん}で勉強^{べんきょう}を続^{つづ}けてもらい、時期^{じき}を見て結婚^{けっこん}できる環境^{かんきょう}が整^{ととの}えばそうしたい、ということでした。

三人^{さんにん}でじっくりと話^{はな}し合^あった結果^{けっか}、一人^{ひとり}あせっていたタロウくんは彼女^{かのじょ}の言^いい分^{ぶん}を聞^きき入^いれ、勉強^{べんきょう}を続^{つづ}けることになりました。結婚^{けっこん}のことは、これからお互^{たが}いの家族^{かぞく}を交^{まじ}えて、折々^{ありあり}に話^{はな}し合^あって行くということで合意^{ごうい}を得^えたのです。

ほとけ
仏^{ほとけ}さまはそばにいる

「ユミコさんは、何^{なん}て言^いっているの？」

「本心^{ほんしん}は結婚^{けっこん}を許^{ゆる}せないようですが、タロウを信^{しん}じて認^{みと}めようと自分^{じぶん}に言^いい聞^きかせているみたいですよ」

「ユミコさんの気持^きちは痛^{いた}いほどよくわかるわ。ノブオ、ユミコさんにやさしくしてあげるのよ」

「はい。タロウのことがあって、ぼくも母^{かあ}さんや父^{とう}さんに、どれだけ心配^{しんぱい}をかけてきたかということが身^みにしみましてね。それでいまさら何^{なん}ですが、そのことをお詫^わびしたいと思^{おも}ったんです」

「まあ」

「ぼくは父^{とう}さんの反対^{はんたい}を押し切^おり、家^{いえ}を出^でて家具職^{かぐしよく}人^{にん}になりましたからね。父^{とう}さんに、大学^{だいがく}まで出^でてなぜだと怒鳴^{どな}られたときのことを、いまでもハッキリと覚^{おぼ}えていま

すよ。それに、母さんたちに内緒で結婚までしてしまって……。ずっと申しわけなかったと思っていたんです。でも、それを言いだすきっかけがなくて」

ノブオさんが顔をあげると、ミチコさんは眼鏡をずらし、ハンカチで目を押さえていました。

「母さん。勝手なことばかりしてきて、すみませんでした。父さんには今朝、お墓の前で手を合わせてきました。でも、父さんと母さんが信仰を伝えてくれたから、冷静にタロウと彼女の話を聞くことができ、いま、ぼくたち家族と彼女がどうすればいいのかわ、仏さまの教えに基づいて考えられたんだと思います。仏さまがタロウのことをとおして、自分を見つめなさいと説法してくださっていることがよくわかるんです。これほど仏さまの存在を肌で感じたことはなかったですからね」

「いままでも、仏さまはノブオのそばにずっといてくださり、お慈悲をかけてくださっていたのよ。ノブオが気がつかなかっただけ。家を出てからのことをふり返ってごらん。たくさんのお慈悲をいただいていることがわかるはずだよ」

「いままでもずっと、慈悲をかけてくださっていた？」

「そうよ。親方、いや社長の家に住み込みで働かせてもらい、一人前に育ててもらったんじゃない。結婚をして、子どもが三人も授かって……」

「そうですね。親方は厳しい人だったけど、そのお陰でぼくも工房を持てるようになったんですからね。ユミコにもだいが苦勞をかけたけど、子どもたちがいたから……」

「これまでのノブオには、辛いことや苦しいことがたくさんあったと思うけど、ふり返ってみると苦勞がみんな自分の人間形成の肥やしになっているんじゃない？ 仏さまは、そのときどきに、どうしたらこの人がよりよく成長・向上できるだろうかと、さまざまな方便を用いて現象を見せてくれるの。ノブオはいま仏さまの存在を感じると言ったけれど、仏さまはいつでもノブオを導いてくださっていたのよ。あなたが仏さまの存在を心の目で観ようとしていなかったから、その存在に気づけないでいただけ」

「仏さまは、いつでも私たち一人ひとりに説法してくださっている……」

「そう。私たちが仏さまを観ようとするれば、仏さまも姿を觀せてくださるの」

「きょう母さんに会ってよかった。これからは、常に仏さまと対話していくよ。母さん、ありがとう」

事例から学ぶ2

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん（75）... 佼成会の青年部活動も経験している 信仰二代目会員

アキオさん（45）... 一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん（38）... 婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん（16）... やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん（9）... 元気いっぱい的小学三年生

中村さん親子の苦悩

その日の午後、タカエさんは道場に支部長さんを訪ねました。婦人部の中村レイコさんの一件を報告するためです。

「支部長さん、お昼前に中村さんと会ってきました。中村さんは一晩かけてじっくりと、これまでの自分を振り返り、母親としてのあり方を見つめ直すことができたと話してくれました。私はその話を聞いているうちに、とてもすばらしい気づきをされたなあと感動しました」「まあ、それはよかった。これで娘さんとの関係も修復されていくわね」

タカエさんと支部長さんが話している中村さんの一件とは、おおよそ次のような出来事です。

夫が二年前から海外で単身赴任している中村さんは、大学三年生の長男と高校一年生の長女の三人暮らし。長女のミキさんは、全国にもその名が知られる有名・進学校に通っています。

そのミキさんがきのうの夕方、大型書店でマンガ本を万引きしたのです。書店の店長から呼び出しを受けた中村さんはひどく動揺し、タカエさんに電話して、一緒について行ってもらいました。タカエさんが知っているミキさんは、どちらかといえば内気な性格でしたから、彼女が万引きをするなど、書店に着くまで信じられませんでした

した。

しかし、書店の事務室のいすに座っているミキさんの姿を見て、タカエさんは目を疑いました。まじめを絵に描いたような彼女が髪を脱色し、派手な化粧をしているではありませんか。ミキさんとは二か月ほど前に会ったきりですが、その変容ぶりにおどろかされました。

店長に何度も頭を下げてミキさんを家に連れ帰った中村さんとタカエさんは、ミキさん自身から詳しい事情を聞こうとしましたが、本人は泣きじゃくるばかりで話をしてくれません。タカエさんは、声を荒らげて娘を詰問する中村さんをなだめ、ミキさんの部屋で二人だけで話しをすることにしました。

部屋に入るとミキさんは、これまでの母親との関係について話し始めました。

ミキさんは、兄と同じ有名進学校に入学したものの、学校の授業についていけず、一学期の成績は学年のなかでも下位のほうでした。決してなまけているわけではなかったのですが、成績表を見た母親から厳しく叱られ、自信を失ってしまったのです。夏休みに入り、母親から毎日「あなたに遊んでいる時間などないはずよ。もっと勉強しなさい」と言われ続けたことで精神的に追い詰められ、さらには「こんな成績では、恥ずかしくて保護者会にも行けない。この学校で常にトップクラスだったお兄ちゃん顔に泥を塗るつもりなの」と言われて、心に深い傷を負ったのです。

ある日突然、ミキさんは髪を脱色し、細いまゆ毛姿で母親の前に立ちました。

以来、家族とは一切口をきかなくなったと言います。マンガ本を万引きしたのも、母親に対する反抗の表われだったのでしょうか。

部屋から出てきたタカエさんは、ミキさんから聞いた話を、すべて中村さんに伝えました。

「そうだったの。私がガミガミ言ったのは、あの子に勉強する意欲がないからだと思っていたの」

「ミキちゃんも一生懸命にやっていたのよ。だけど、それが成績に結びつかなかったから、苦しんだと思うわ」

タカエさんと中村さんは、その晩遅くまで、ミキさんの気持ちや母親としてどのようにふれあっていけばよいかなどについて話し合いました。

ほとけ
仏さまのはたらき

「支部長さん。中村さんはミキちゃんの姿をとおして、ほとけさまが母親としてのあり方を教えてくださったと言うんです」

タカエさんと支部長さんは道場の法座席で、ご本尊さまを見上げるようにして座っています。

「中村さんは、優秀だったお兄ちゃんとミキちゃんを見比べて、お兄ちゃんがこれだけできたのに、どうしてミキちゃんにできないのかと、いつも責めていた自分の姿に気づいたそうです」

「きょうだいで、一人一人は違う人格なのだから、その子の持っている個性を認めてあげることが大事なんだということに気がついたのね」

「はい。それから中村さんは、勉強のできる子どもを持っていることが自慢で、子ども自身を愛していたのではなく“よい成績”を愛していた愚かな母親だったと、涙を流されていました。母親としての絶対の愛情を子どもたちに注いでいなかった、ほんとうに申しわけなかったとも、おっしゃっていました」

「よかったわ。ミキちゃんのことをとおして、「中村さんの心が開いたのね。『如来寿量品』に六或示現が示されているように、仏さまはさまざまな方便を用いて私たちを救おうとはたらいてくださっているの。避けて通りたいような出来事のなかにも、仏さまの慈悲がたくさんつまっている。中村さんも、ミキちゃんの一事件をとおして、いままで見えなかった大事なものを、仏さまから教えてもらったのね」「私たちは一つ一つの現象のなかから、仏さまの慈悲をしっかりとつかみとり、味わっていくことが大切なんですね」